「会津藩の医者 加賀山 翼 （前編）」

ぶん・え　三井　もとこ

CNCP 個人正会員・理事

高校生の頃、おれは、寺の境内で遊ぶのが好きだった。まだ雪の残っていた３月の昼過ぎ、ひとりで本を読んでいたおれに、本堂から出てきたお尚が、こう言った。

「おい、仁。今日はお前のご先祖の加賀山翼先生の誕生日だぞ。ちょうど良い、墓のまわりを掃除して来い」

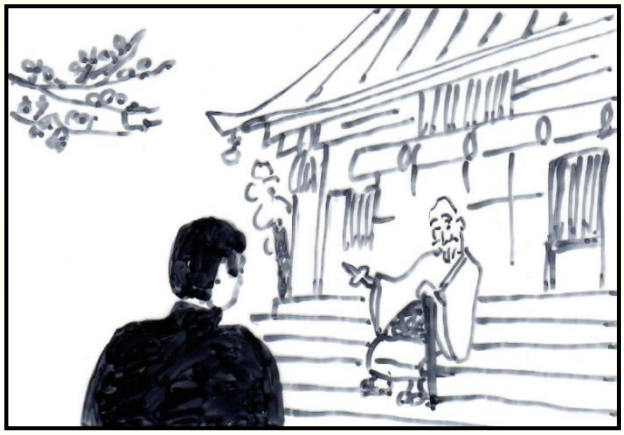
「えっ！加賀山翼って誰っすか？おれ、聞いてないし。」とおれ。

「ほう、知らんのか。この村のもんは、いまでも翼先生、翼先生と慕って、命日の４月２９日には、墓参りに来る人も多いのというのに、その子孫のお前が知らんとはなあ。」

といって、本堂の階段に座り込んで、話しを始めた。

ええか。加賀山翼先生はな、会津藩主、松平容保公の頃に、会津藩の御側医をしていなさった方だ。藩の医者の次男として生まれ、通称潜龍、号を仁山といった。幼いころに、同じ藩の医者の加賀山家に養われて、２４歳で医者となった。

そしてわずか２７歳のときにな、「自分は藩の医者の子だから、藩からお金を出してもらって、医学の遊学（勉強）ができ、江戸や長崎にも勉強に行ける。しかし、町医者の子は、そうはいかない。なんとかならんものか」と考えて、同僚の佐藤雄庵とともに、藩に意見書を出したそうだ。



「「遊学資金財団」というものを作り、医者の家から寄付を募って、その利子で、勉強したいものにお金を出してはどうか」

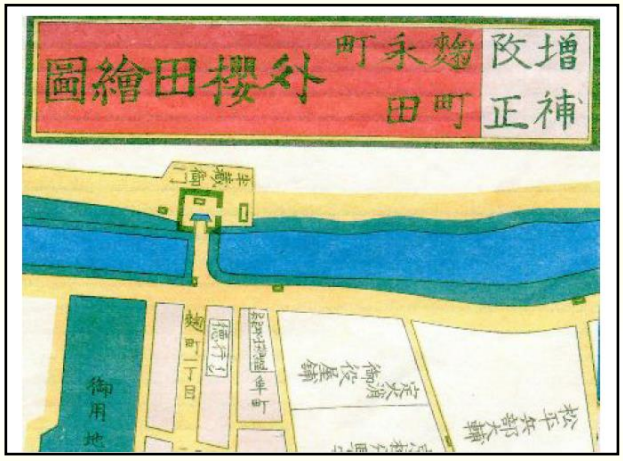
とな。藩もこれを聞き入れて、「遊学資金財団」が出来上がった。身分制度のきびしい時代にだぞ。他の藩ではこんなことはやっていなかった。日本の医学史でも、初めてのことだったそうだよ。

安政４年、翼先生４７歳の時、江戸に勉強に行き、西洋医学（蘭学）で有名な伊東玄朴や織田研斎のもとで学んだ。

安政といえば、ほれ、安政の大獄で有名な井伊直弼が桜田門外で、暗殺されたころだなあ。

その頃、江戸ではコレラという伝染病がはやっていてな、７０万人もの方が亡くなったそうだ。翼先生は、オランダ語のコレラの本を読みあさり、翻訳して、医者たちに治療法を伝え、多くの患者を助けた。これには、伊東玄朴も「加賀山翼は敏達豪俊のもの也」と絶賛していたという。

安政６年６月、翼先生は、もっと皆が西洋医学を学ぶ必要性があると考えて、江戸の御屋敷内に蘭学館を設立することを願い出て、許可され、伊東玄朴や織田研斎、山根敬造らと医学を広めたそうな。



その年の９月、会津に戻ると、藩は日新館医学寮に蘭学科を設立して、翼先生を師範として迎えたという。どうだ、仁、日本で初めての医学所は、この会津からはじまったんじゃよ。

「へーっ、すごいなあ。しっかし、相変わらずお尚の話は長いなあ～」とおれ。

「ははは、ついつい長くなっちまった。そういえばお前の名前は、仁じゃないか。翼先生の名前からもらったんだなあ。」

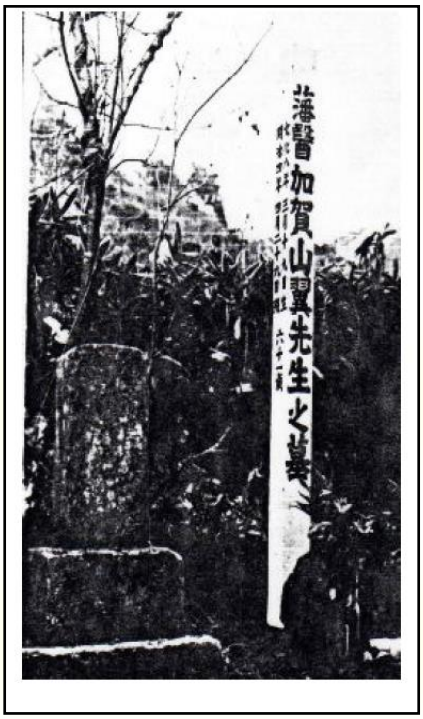
「あ！そうなのか。だけどさ、なんで会津藩からそんな、日本で初めてのことが、次々にできたんだよぉ。おかしくない？」

「それそれ、その話となれば、会津初代藩主の保科正之様のことを話してやらなくてはのお。」

「やば、いいよ、いいよ、お尚。今日はもういいって。」

「ははは、そうか、そうか。では、次の機会に話してやろう。さ、そこまで分かったら、翼先生の墓の周り、掃除してこい。よいな」

「わかった、わかった。」



そういうと、おれは、本堂の下の坂を転げるように下りて、加賀山家の墓に行ってみた。丘の上にあるその墓からは、会津の町が見おろせた。淡いみかん色の夕焼けが、柔らかく町を包んでいた。（つづく）

※加賀山翼は、文化８年（１８１１年）に生まれ、明治４年（１８７１年）に亡くなった。